

台湾現代史史料をめぐる動向 —歴史と現実政治との対話

法政大学法学部教授 福田円

はじめに

筆者は2021年4月から11月まで、所属する法政大学の在外研修制度を利用して、中央研究院政治学研究所に訪問研究者として籍を置かせてもらい、台湾での調査を行った¹。今回最も行いたかったことは、各種档案館や図書館において、1970年代の中台間の外交闘争に関する史料を体系的に収集し直すことである。これは、この10年ほど断続的に取り組んできた作業であるが、通常の1週間程度かつ他の出張を兼ねるような滞在ではなかなか腰を据えて取り組めなかった。また、閲覧方法や規則が変化する台湾の各種档案館や図書館の最新の状況に自分が追いついておらず、作業効率が落ちていることも感じていた。そのため、この長期滞在を機に、各種档案館や図書館の現状理解をアップデートし、今後の短期滞在時に作業をスムーズに行えるような蓄積を自分の中に作りたと思った。本文はその備忘録であると同時に、台湾の現代史研究、特に中国大陸との関係も含む対外関係史や国際政治史の研究に関心のある方の参考に供するものである。

筆者は前年の2020年度に米国のスタンフォード大学フーバー図書館でも同様の作業を行い、蔣経国の日記をゆっくり閲覧する機会にも恵まれた。そのなかで、1970年代の中台間の外交闘争が、欧州・国連、日本、東南アジア、米国へと舞台を移しながら展開し、1980年代にはより直接的な闘争

へと移行していく様子や、そのなかでの蔣経国の認識の推移を臚げながらも掴むことができた²。そこで、今回はこうした中台外交闘争をさらに立体的に考証するための史料を閲覧・収集するという方針で作業を進めた。本稿では各種档案館や図書館の現状に加え、筆者の上記問題関心を事例に、具体的にどこでどのような史料が閲覧可能なのかも紹介してみたい。

国家図書館や大学図書館の活用

新たな研究テーマに取り組む際に、いきなり档案館に向かい、一次資料の海に飛び込むことは危険である。漠然と史料の閲覧を申請し、眺めるなかからアイデアが浮かんでくることもあるが、多くの場合は指標を失い、溺れてしまうだろう。やはりまずは、年鑑などの基本資料で概要を掴み、論文検索や書籍検索を行なって、先行研究について理解し、整理する必要がある。その際に、台湾では国家図書館を活用するのが最も便利な方法であることは、論を待たないだろう。日本の国会図書館と同様に、国家図書館のウェブサイトは大変充実しており、所蔵書籍だけでなく、論文などの検索も容易に行える³。図書館内で使用できる台湾や諸外国の各種論文、新聞などのデータベースも便利である。また、館内データベースで入手できるデータは基本的に持ち出せるので、国家図書館で調査をする際はUSBを持参するのがお勧めである。

1 なお、外交部の「台湾奨励金 (Taiwan Fellowship)」より支援を受けた。記して感謝を申し上げたい。

2 この成果を簡単にまとめたものとして、拙稿「1970年代国際秩序の変容と台湾——蔣経国の『一つの中国』をめぐる認識と対応」日本国際問題研究所領土・主権・歴史センター『歴史系検討会論文集』2022年3月 (<https://www.jiia.or.jp/JIC/pdf/2-6.pdf> 以下、URLはすべて2022年6月19日確認)。

3 国家図書館 (<https://www.ncl.edu.tw>)。

国家図書館は研究や史料状況を概観するには適しているが、書籍や論文は持ち出せず、自宅など館外から館内のデータベースにアクセスすることも難しい。そのため、大学院生や研究者の場合、台湾滞在中に大学図書館や研究機関などで図書館を使用できる身分を得られるならば、それに越したことはない。筆者も、留学時代からお世話になっている中央研究院および国立政治大学の図書館を活用させてもらった。

中央研究院は研究所ごとに図書館を持つのが特徴であるが、院内の図書は全て一つのデータベースで管理されており、特殊な場合を除いては、自分の所属研究所以外の図書館も利用することができる⁴。政治大学内にも複数の図書館があるが、こちらの蔵書も図書館のウェブサイトから横断検索をすることが可能である⁵。

政治大学では、2020年に達賢図書館が新たに開館した。筆者も滞在中に何度か利用したが、あまりにも素晴らしい図書館なので、館内の様子を写真におさめ、日本の同僚にも紹介したほどである。この図書館の開館に伴い、以前の社会科学資料センター（社資中心）は閉館し、その機能は中正図書館と達賢図書館に移行した。台湾現代史研究との関係では、以前の社資中心にあった孫中山図書館は中正図書館の1階へと移動している。後述するように、以前国民党中央党史委員会の档案館が所蔵していた国民党関係の史料はこちらに移管されたので、注意が必要である⁶。

一次資料は公文書館／档案館だけが所蔵するものではなく、こうした図書館も貴重な一次資料を所蔵している。例えば、筆者が台湾滞在中に少しずつ収集しているのは、中央研究院近代史研究所や政治大学の図書館が所蔵する一党体制期の国民党内部資料である。これらのなかには、国民党内部の政策決定、調査、宣伝などに関するもののほか、中国大陸関連の調査分析資料なども多く含ま

れており、筆者の研究には有用である。

これらは、各図書館で特にシリーズ化されておらず、通常の図書や雑誌と同様に扱われているので、キーワード検索や関連検索を活用し、芋づる式に探し出す必要がある。近代史研究所の図書館では、最近は国民党関係の内部文献は1階の中文書籍コーナーにまとめて配架するようになっており、書架へ赴けば、関連する文献を見つけやすくなった⁷。政治大学では、こうした内部文献は長らく社会科学資料センター、国際関係研究中心の図書館、中正図書館内外の書庫などに分散していた。そのうちの一部は、新しい達賢図書館の特蔵中心にまとめて所蔵されるようになってきている⁸。ちなみに、この特蔵中心では「台湾政治と社会の発展に関する海外史料」のコレクションを続けており、党外雑誌などのデジタル化が進みつつある⁹。今後、1980年代、1990年代の台湾政治外交史や社会史を研究する際には、これらも有用な史料となるだろう。

国史館史料のデジタル化

国史館は総統府直属の歴史研究機関で、国史や史料集の編纂のほか、史料館としての役割も担っている¹⁰。主な所蔵史料は歴代総統、副総統に関する文書と、各行政機関の文書である。このうち、近年公開される各行政機関の文書は、国史館ではなく、後述する国家档案管理局に移管されるものが多い。国史館は現在、博物館と閲覧室からなる台北館と、史料を保管し、整理などを行なっている新店館に分かれている。また、2016年以降、デジタル化した文書のオンライン公開を進めており、多くの文書をオンラインで閲覧できる。

国史館を利用する際には、オンラインで閲覧できないものも含め、国史館のウェブサイトから統合目録を検索できるので、必ず事前にオンライン目録で史料状況を確認し、必要に応じて申請を行

4 中研院図書館服務 (<https://aslib.sinica.edu.tw>)。

5 国立政治大学図書館 (<https://www.lib.nccu.edu.tw>)。

6 社会科学資料中心 (<http://ssic.rdw.lib.nccu.edu.tw>)。

7 中央研究院近代史研究所郭廷以図書館 (<https://lib.mh.sinica.edu.tw/lib/>)。

8 政大特蔵中心 (<https://da.lib.nccu.edu.tw>)。ただし、特蔵中心は複写料金が高額であるため、他の場所に所蔵がない物かどうかをよく確認した上で利用することをお勧めする。

9 台湾政治與社会發展海外史料 (<https://da.lib.nccu.edu.tw/sp-3.html>)。

10 国史館 (<https://www.drnh.gov.tw>)。

わなくてはならない¹¹。1) オンラインで閲覧可能なものはオンライン閲覧およびダウンロード、2) デジタル化されておりオンライン閲覧不可なものは、台北館にて閲覧、3) デジタル化されていない原本は、閲覧予約をした上で、新店館にて閲覧、4) 公開準備が整っていない文書は閲覧申請をし、30日以内に指示される方式で閲覧、以上のいずれかの方法で閲覧することになる。複写に関しては、2) はプリントアウトかデータで購入することが可能であり、3) は自分でカメラを持参して撮影するか、コピーを取ることが一般的である。

台北館の閲覧室を利用することに関して予約は必要ないので、台北に在住している方が初めて利用するような場合は、一度台北館を訪れて、スタッフにも相談しながら、閲覧室のパソコンでオンライン目録の検索や必要な申請をすることも可能である。実際、筆者が閲覧中にも、そのような来訪者を複数回見かけた。台北館には展示室と売店が併設されており、国史に関する企画展を鑑賞したり、国史館の出版物や国史に関連する書籍、歴代総統や国史に関する映像資料などを購入したりすることも可能である。

今回、筆者は国史館にて、1970年代の中華民国と各国の断交に関連する蔣経国総統文書のほか、外交部档案のなかに含まれる、海外対匪闘争工作統一指導委員会（陸海光）とその後継組織の記録を閲覧・収集した¹²。それに加えて、例えばピンポン外交などが有名な例であるが、中国からの外交攻勢や統一戦線工作への対応に関する史料も収集した。海外対匪闘争工作統一指導委員会と、それに続く対敵闘争工作の記録は分量がかなり多く、デジタル化され中央研究院近代史研究所档案館（後述）や国史館台北館で閲覧できるものと、新店館でしか閲覧できない原本に分かれていた。これらは、国府の対匪闘争工作や対敵工作の重点が、中国共産党との闘争から、海外の台湾独立運

動へと移っていく様子が如実に分かる、興味深い史料である。

中央研究院近代史研究所档案館の外交部档案

中央研究院近代史研究所は档案館を有し、20世紀以降の経済部門や外交部門の文書を数多く所蔵する¹³。筆者がここで閲覧するのは主に戦後の外交部档案であるので、ここでは外交部档案について説明する。中華民国／台湾の戦後国際政治史、ないしは外交史を研究する場合、外交部の役割や重要性はその時期によって異なるので、その点には注意して史料を閲覧したり、解釈したりする必要がある。とはいえ、こうした研究を行う上で、外交部の档案は欠くことのできない史料である。現在、閲覧できる台湾移転後の中華民国外交部の档案は、主に3ヶ所に分散している。1) 比較的早い時期に公開されたものは前述の国史館、2) その後主に2007年、2014年の2度にわたり外交部から移管されたものが中央研究院近代史研究所の档案館、3) 近年の国家档案管理法に基づいて公開されるものが国家档案管理局に収蔵されているというのが、筆者の大まかな理解である。

中央研究院近代史研究所の档案館は、上記のうち1)の一部と2)を網羅する目録を公開している¹⁴。これは2012年に中央研究院近代史研究所と国史館が共同で档案のデジタル化や目録の整理を行なった成果である。逆に、国史館の目録で外交部の档案を検索しても、近代史研究所が所蔵するものは含まれないので、外交部档案の全容を掴みたい場合は、まず近代史研究所档案館の目録を確認する必要がある。目録のページには誰でもアクセスし、史料の検索を行うことができる。閲覧方法は基本的に館内閲覧であり、デジタル化された档案を館内のパソコンで閲覧する。複写は有料の複写サービス（プリントアウト）もあるが、デジタルカメラや携帯電話でパソコンの画面を撮影す

11 国史館档案史料文物查詢系統 (<https://ahonline.drnh.gov.tw/index.php?act=Archive>)。

12 海外対匪闘争工作統一指導委員会の成り立ちについては、森巧「中華民国政府の大陸反攻と対外政策機構（一九五〇—一九五八）：海外対匪闘争工作統一指導委員会を事例に」『東洋学報』101巻1号、1-30頁、1960年代の展開については、清水麗「台湾外交の形成—日華断交と中華民国からの転換」（名古屋大学出版会、2019年）第5章に詳しい。

13 中央研究院近代史研究所档案館 (<https://archives.sinica.edu.tw>)。

14 近史所档案館館蔵検索系統 (<http://archdtsu.mh.sinica.edu.tw/filekmc/ttsfile3?@14:421179708:0::>)。

るならば、無料である。

筆者は中央研究院に籍を置かせてもらったこともあり、今回はこの近代史研究所档案館で最も長い時間を過ごした。それでも、まだまだ多くの心残りがあるほど、公開されている外交部档案はファイル数、ファイルごとの文書数ともに膨大である。ただし、その中には新聞の切り抜きのみで構成される情報整理のファイルや、要人往来など特定の案件のロジスティックに関わる部分のみで構成されるファイルなどもあるので、必要なファイルを選別する必要がある。筆者は、まずオンライン目録で開けるべきファイルのリストを作り、それらを一通り開けてみるだけの作業日を設けて、リスト内のファイルで閲覧・複写すべきものを選別、優先順位を付けた上で、順番に閲覧・複写するという順序で作業を行なっている。またこの際に、元々国史館の所蔵である文書に関しては、国史館でオンライン公開している場合もあるので、その点も調べておく必要がある。

今回、筆者はまず、先述の海外対匪闘争（当時は「対匪闘争」と呼ばれていたが、外交部の目録上は「対中共闘争」となっている）に関する史料を閲覧した。その後、米中接近から国交正常化、日中国交正常化から平和友好条約、その間に起きた中国とタイ、マレーシア、フィリピンとの外交関係樹立に対する国府の対応を順番に調べていった。これは国府の側から見れば、米国や日本との「断交」、東南アジア諸国の「応変」ということになる。これらの史料を概観して気づいたことは、1975年前後を境に外交部の史料の残し方、あるいはその公開の程度に断絶が見られることである。今回の最大の目的は、中国との外交闘争の山場である米華断交に関してできる限り詳細を理解することであったが、1976年から1978年初の米華関係に関するファイルは少なく、むしろ断交後の米台関係に関するファイルの方が数多く公開されているように思えた。

国家档案管理局と国家档案館の建設計画

国家档案管理局は、国家発展委員会の下に20年ほど前に設置された国家の公文書管理機関で、現在は新北市新莊区の局内に閲覧室を構えている¹⁵。現在、同市林口区に国家档案館を建設中であり、2025年の完成を目指している。この機関には、總統府や行政院の下に設置される各機関の文書が移管される。移管された文書の多くは閲覧に審査を要する状態なので、まず同局の電子目録から閲覧申請を行い、審査結果を待つ必要がある¹⁶。一度に申請できる件数は10件で、1か月以内に審査結果が出るので、短期滞在中の閲覧を希望する場合は、国家档案局でも利用できる「我的E政府」のアカウントを作成し、事前に閲覧申請を行う必要がある。なお、オンラインで申請した後、自筆でサインをした紙本申請書（スキャンなどしたデータも可）を国家档案局にメールで送付しなければ、審査は始まらないので、この点には注意が必要である。国家档案館が建設中であることから、同館が開館すれば、こうした申請や閲覧・複写のルールはまた変わるかもしれない。

国家档案管理局の閲覧室では、審査時に許可された方法で、史料を閲覧することができる。既にデジタル化されている档案は、閲覧室のパソコンを使用して閲覧し、プリントやデータの複製を申請することができる。原本の閲覧が認められるものは、カメラを持ち込んで撮影することができる。なお、データの複製を希望する場合、料金を国家档案管理局指定の口座に振り込むことができるならば、海外から申請し、複写の海外への郵送を依頼することもできる。筆者は今回の滞在中に2度申請を行い、1970年代の米華軍事協力に関する史料（国防部）と、米華断交後の台湾の対米工作検討に関する史料（外交部）を閲覧・複写した。いずれも10巻以上のファイルから成り、各ファイル内の文書量も多いので、近代史研究所の外交档案と同様、現地で全体をしっかりと閲覧するには、それなりの時間を確保する必要がある。

15 国家発展委員会档案管理局 (<https://www.archives.gov.tw>)。

16 国家档案资讯网 (<https://aa.archives.gov.tw>)。

国民党党史館の史料移管について

中国国民党文化伝播委員会党史館（通称党史館）は、中国国民党の党史委員会と文化工作委員会が合併してできた機関であり、2000年代から当時の中央党部ビル（現在の張榮發基金会ビル）7階に閲覧室を設け、史料を公開してきた。その後、国民党中央党部ビルの移転に伴い、党史館も八徳ビルの4階へ移転し、史料の公開を続けていた¹⁷。しかし、国民党の財政問題や、「移行期の正義」の観点からかつて台湾で一党体制を敷いていた国民党の党史史料（とりわけ二二八事件などに関連する「政治档案」）の国家機関への移管を求める声が大きくなるに伴い、党史館は八徳ビルの閲覧室公開を細々と続けつつ、史料のデジタル化を進めた¹⁸。2018年に党史館は政治大学と協定を締結し、共同でデジタル化を加速させ、最終的には閲覧室を政治大学へ移すことに合意した。その結果として、2021年12月以降、党史館が所蔵する党史史料は、前述の政治大学孫中山記念図書館で閲覧できるようになった¹⁹。

現代史研究の場合、国民党党史館で閲覧すべき史料は当該時期に開催された党中央常務委員会の会議録である。中央常務委員会は国民党の最高政策決定機関であり、毎週開かれる会議においては内政から外交まであらゆる問題が報告または審議される。また、各種報告に添付される分析資料にも、史料的な価値の高いものが多い。ただし、党史館の史料は複写や写真撮影が不可であり、必要な箇所は筆写またはパソコン持ち込みで打ち込むしかない。そのため、長期滞在の時こそ党史史料をじっくりと閲覧する機会であったのだが、政治大学への移転作業の影響で、目当ての史料を閲覧することはできなかった。ただし、筆者は八徳ビルの閲覧室を最後の姿を目にすることができた。それは党本部1階の片隅をパーティーションで仕切り、簡易的に設けられた小さな空間となっていた。凱達格蘭（ケタガラン）大道を挟んで總統府に向

き合う以前の党本部ビルの時代から党史館の閲覧室を利用していた筆者は、なんとも感傷的な気持ちになった。独裁政党であった国民党が、党本部内に閲覧室を設けて私的に档案を公開してきたことも、台湾の民主化の一つの成果であったことに、改めて思いを致した。とはいえ、デジタル化された文書が政治大学の孫中山図書館で保管され、閲覧に供されることは、研究者にとっては朗報である。次の滞在時には必ず利用したい。

蔣経国總統図書館と台湾現代史研究の課題

筆者が調査に利用した図書館や史料館のほか、関係者のご厚意で、2022年1月に開館した蔣経国總統図書館を開館前に見学させてもらったことは、印象深かった。同図書館は台湾初の總統図書館であり、蔣経国の旧居「七海寓所」がある区域に設けられた「蔣経国七海文化園区内」内に建設された²⁰。台湾出身で欧州を中心に活躍する建築家の符傳禎（Charles Phu）が設計したことでも注目を集めている。本図書館の設置プロジェクトは、蔣経国国際学术交流基金会が中心となって進めてきたが、同基金会の幹部らは米国の歴代大統領図書館をくまなく見学し、どのような總統図書館を作るべきか議論を重ねてきたという話も数年前に聞いたことがあった。そのため、どのような總統図書館が完成したのか楽しみにしていたが、確かに素晴らしい施設が完成していた。現在は同文化園区のウェブサイトなどから写真を見ることができ、台北にお住まいの方は一度足を運んでみて欲しい。

蔣経国總統図書館のつくりは、確かに米国の大統領図書館と似ており、図書館や文書館の閲覧スペースに、ミュージアムが併設され、そのほか小規模な会議などを催せる場も設けられている。筆者の見学時は未完であったが、簡単な飲食ができるカフェや記念品を購入できるギフトショップも併設されているようである。ただ、大きな問題は、台湾には既に歴代總統の文物を収蔵する国史館が

17 「關於我們」中国国民党文化伝播委員会党史館（http://archives.kmt.org.tw/cgi-bin/g32/g3web.cgi/ccd=8a_ffX/aboutus）。

18 この経緯がよく示されている文章として、王文隆「当党史遇上轉型正義 档案保存與正義只能轉型？」（2020年9月22日）VIEW POINT TAIWAN（<https://www.viewpointtaiwan.com/commentary/當党史遇上轉型正義-档案保存與正義只能轉型？/>）。

19 「中国国民党党史档案」政治大学社会科学資料中心（<http://ssic.rdw.lib.nccu.edu.tw/services/kmt-archives/>）。

20 蔣経国七海文化園区（https://ccklibrary.org.tw/w/zh_tw/index）。

あり、蔣経国の日記はスタンフォード大学フーバー研究所の管理下にあり、現時点ではこの総統図書館が独自で所蔵、公開している史料が殆どないことである。ちょうど蔣経国総統図書館が開幕した頃、国史館は今後順次整える「歴代総統資料庫」の第一弾として、「蔣経国総統資料庫」をウェブサイト上で公開した²¹。ここには国史館所蔵の蔣経国総統文物に加え、蔣経国学術交流基金が独自に収集した史料や、スタンフォード大学フーバー研究所の協力による蔣経国日記の抄録なども含まれている。

このような連携にも関連し、陳儀深国史館館長は、今後李登輝総統図書館の計画が進む可能性も視野に入れ、台湾における総統図書館の位置付けを明確化する必要性を指摘している。陳館長は、台湾は米国のように各大統領の支持団体が地元で図書館を建設し、国立公文書管理局（NARA）がそれらを統括して管理するようなシステムではなく、最近の韓国のように政府機関が統一的に歴代総統図書館を管理すべきだと主張する。また、いずれにしても、総統図書館を位置付け、管理する法律が未整備であることは問題であり、法整備を急ぐべきだとも主張する²²。

独自の所蔵史料が少ないなか、蔣経国学術交流基金が力を入れたのが、蔣経国の側近はじめ同時代の関係者へのインタビューである。この一部は、ミュージアムの一角で音声を聞くことができる。このようなミュージアムの展示内容は筆者にとっても興味深く、地元の学生や家族連れが訪れるのにもちょうど良さそうだった。蒋介石時代とは異なり、蔣経国時代には経済発展や限定的ではあるものの政治改革など、現在の台湾との繋がりを考えられる題材が複数あり、台湾における国民党一党体制の歴史をめぐる対話の場となりそうだと感じた。そのことを、関係者に伝えてみたところ、国民党一党体制期の相対化や、異なる歴史観をもつ人々の対話を進めていくのは、筆者が考え

ている以上に困難なことなのだという趣旨の反応があった。そして、その意味はすぐに分かった。同図書館の開幕式でスピーチを行った蔡英文総統はまさに、蔣経国総統図書館が「台湾社会の分裂を解消する役割を果たす」ことへの希望を語った。「そうでなければ、台湾で蔣経国前総統は永遠に一部の人だけの蔣経国だ」と、蔣経国時代といえれば経済発展や安全保障を想起する人々と、権威主義体制を想起する人々の間の溝は埋まらないと訴えた²³。しかし、このスピーチに対しても、「政治受難者」と呼ばれる二二八事件や白色テロの被害者とその子孫たちから厳しい批判が加えられた²⁴。この出来事は、台湾の現代史をめぐる台湾内部での対話の難しさを表しているように思う。

おわりに

本文で紹介したように、台湾における現代史史料の公開状況は、1) 史料のデジタル化という全体的なトレンド、2) 台湾の政治動向とリンクする現代史（研究）や公文書管理をめぐる議論、3) 所蔵各機関の財政など諸事情の影響を受け、変化を続けている。そのため、台湾において現代史史料を閲覧・収集する場合は、史料自体や所蔵機関がどのような政治的文脈の中に置かれているのかを意識することが重要であるし、そこから学ぶことも多い。また、それらの史料がどのような経緯を経て、所蔵機関にあるのかということも、把握しておかなければならない。例えば、戦後の外交部档案は複雑な経緯を経て、3つの機関に分散して管理・公開されているので、それを理解しておかないと、自分が必要とする史料を体系的に収集することは難しい。今後も、総統図書館をめぐる議論の展開、国家档案馆の開館に向けた動向など、新たな変数に注目しつつ、情報をアップデートし続ける必要がある。それもまた、台湾現代史研究の醍醐味であると言えよう。

21 蔣経国総統資料庫 (<https://presidentialcck.drnh.gov.tw/index.php?act=Archive>)。

22 陳儀深「蔣経国総統図書館vs.中正紀念堂」『自由時報』2022年1月22日。

23 「総統出席『蔣経国総統図書館開幕典礼』(2022年1月22日)」中華民國總統府HP (<https://www.president.gov.tw/News/26510>)。

24 「蔡英文出席台湾前総統『蔣経国紀念園區』開幕致詞引發哪些政治議題及弁論(2022年2月5日)」BBC NEWS 中文 (<https://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese-news-60242279>)。